

〔能楽〕 研究展望(昭和62年)

田口, 和夫 / 西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
野上記念法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

179

(終了ページ / End Page)

196

(発行年 / Year)

1990-12-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020418>

研究展望 (昭和62年)

西野 春雄

田口 和夫

62年は、能も狂言も、今後の研究の出発点となるような基礎的研究や著作が目立った。これらを含め、62年に発表・刊行された能楽関係の文献については、雑誌『観世』連載の小林責・池田英悟氏「能・狂言文献要覧」、小林保治氏編「昭和62年能・狂言研究文献目録」(『観世』63年9月)があり、月曜会雑誌『能研究と評論』17号(平成元年12月)に詳細な「昭和62年能・狂言関係文献目録」(樹下文隆・橋本朝生氏担当)が載っており、ほぼ全体を鳥瞰し把握することができる。また西村聡氏が『文学・語学』119号(平成元年1月)に「昭和62年国語国文学界の展望(Ⅰ)」として「中世(演劇)」を担当し、研究動向を指摘している。いずれも有益で、本稿も参考にさせていただいた。

一番新しく詳しいのが月曜会作成の目録であるが、発表点数の庞大さと、取り扱うテーマの広がり、視座の多様さ(それは掲載誌の多様さを物語る)に驚きを禁じ得ない。そして研究展望がもはや一人では無理になりつつあることを痛感する。本欄が西野・田口両名の分担執筆とした事情もそこにある。

それにしても、平成2年の秋に、数年前の展望を載せるのは恥づかしい限りであるが、記録の意味も込めて、能楽関係刊行

図書の紹介と、主な論考、調査・考証などを中心に述べることにしたい。分担は、能を西野が、狂言を田口が担当し、単行本については適宜分担した(各書目の末に担当を略示。刊行順)。

〔単行本(含、シリーズ物)〕

『岩波講座 能・狂言Ⅲ 能の作者と作品』(横道萬里雄・西野春雄・羽田昶著。岩波書店。1月。変型A5判三八三頁。三四〇〇円)

第二次大戦前から戦中までの研究成果や能楽に関する基礎知識を盛り込んだ『能楽全書』は、昭和五十四年から五十五年にかけて総合新訂版として出版されていて多くの人に愛読され、現在でも有益なものである。しかし、戦後の能楽研究の進展はまことに多大なものがあり、能楽史研究・作品研究・技法研究などいずれの面をとっても、『能楽全書』旧版を超える成果が得られている。それらは一般の人の眼に触れにくい研究誌・専門誌に発表される事が多く、研究者の中では常識となっていることでも、一般能楽愛好者は勿論のこと、歴史学者の段階でも、その新しい成果が周知されているとは言い難い状況であった。

能楽研究については、他分野の研究者も含めて、素人がうっかり物もいえないという気分まで流れ始めていたというのが実情であろう。こういうとき、この岩波講座が出版された意義は大きい。広く能楽愛好者を読者に予想して編まれたために、いわゆる研究論文的な記述の仕方ではないのだが、内容的には従来の研究を総括し、随所に新見を盛り込んだものとなっている。

本講座の第一回配本で、これ以降の配本と異なり、目次に執筆者名を明記している。「一総記、二能本の概観」は横道萬里雄氏の執筆である。ことに二は能本の形態論で、いわゆる横道理論に基づく分析が記される。場・段・小段などの考え方は、早く横道氏によって日本古典文学大系『謡曲集』に具体化され、伊藤正義氏の新潮古典集成『謡曲集』にも採用され一般化しているが、それを含めて、横道理論をまとめてうかがう事ができるのは有難い事である。ただし、批評用語としての「統一イメージ」を「統象」と呼ぶような新語は異和感を増すだけで、あまり有効ではないと思われる。三以降は作者と作品を記述するもので、西野春雄氏による「三古作能の作者と作品、四中作能の作者と作品」、羽田昶氏による「五近作能・近代能・現代能の作者と作品、六能技法前提の現代演劇」がある。古作能としては観阿弥・非観世系の亀阿弥・増阿弥・犬王・榎並と井阿弥・金春権守と金剛権守を取り上げる。中作能とは聞きなれぬ用語だが、世阿弥を中心に禅竹・元雅・宮増・信光・禅鳳・長俊・素人作者・作者不明と広範囲に取り上げている。作者について概説してから作品の特徴に触れ、研究の現段階を総括する。

今後の研究の出発点としてこの段階を踏まえておく必要があるであろう。羽田昶氏の五は、豊公能・江戸期の能を略述してから近代能・現代能について資料を引いて詳述する。六とあわせて近代能楽史の具体相を把握しているといえよう。(田口)

『世阿弥の後姿』(高野敏夫著。河出書房新社。1月。B6判一八九頁。二〇〇〇円)

前著『世阿弥—へまなごし—の超克』の続篇。観客(見られるもの)と、芸能者(見られるもの)との相克を論じ、同時代人として、世阿弥の生きる姿勢を追究する。(西野)

『世阿弥随筆』(檜書店編集部編。檜書店。2月。B6判二四一頁。一五〇〇円)

副題「世阿弥生誕六百年に寄せる諸家随筆集」。世阿弥生誕六百年の昭和三十八年を中心に、昭和三十五年から同四十年にかけて雑誌『観世』に掲載された諸家の巻頭随筆をまとめたもの。栗林貞一「能楽の開眼者世阿弥」から斎藤太郎「含蓄のある世阿弥の言葉」まで、七十四編を収録。世阿弥の伝書や能、またはその生涯にふれた感動を綴って、興味は尽きない。(西野)

『時衆文芸と一遍法語—中世民衆の信仰と文化—』(金井清光著。東京美術。2月。A5判五四八頁。一八五四〇円)

著者の姿勢は副題からもうかがわれ、能楽関係では、能「実盛」「安宅」と時衆を収める。(西野)

『中世仮面の歴史的・民俗学的研究』(後藤淑著。多賀出版。2月。A5判一〇二八頁。二二〇〇〇円)

副題「能楽史に関連して」。全国の民俗芸能調査に従事し、

特に未開拓の分野、民間の仮面研究に取り組み、各地の神社を探訪して地方に散在する仮面の調査蒐集に努めてきた著者ならではの労作。特に第一部資料編は、多年にわたる調査を基礎に、中世仮面の背景としての芸能の広がりをも明示。中世仮面研究の集大成といえる、本書ほかの研究に対し、第十一回観世寿夫記念法政大学能楽賞が贈られた。(西野)

『早歌の創造と展開』(外村南都子著。明治書院。2月。A5判五七四頁。九八〇〇円)

第二篇早歌の展開、第十二章早歌から能へ、第十三章早歌から能の継承したもの、第十四章早歌の両曲から能への三章にわたって取り上げ、結語でも「早歌の曲にかもし出されたさまざまな曲趣を、それにふさわしい人物を中心に能の形に立体化する」という世阿弥の方法があったと指摘している。(田口)

『日本人の古典詩歌』(B・H・チェンバレン著。川村ハツエ訳。七月堂。2月。B6判三〇〇頁。一八〇〇円)

一八八〇(明治十三年)にロンドンで出版されたチェンバレンの“The Classical Poetry of the Japanese”の訳。彼の英訳は「英語の作詩法との調和を考えてなされた美しいもので、逐語訳ではない。日本語のエスプリを大切に注意され」謡曲を日本文学の一ジャンルとして認め、叙情・詩劇と把握している。「羽衣・殺生石・邯鄲・仲光」を収め、英文も提示しつつ訳文を示し、適切な訳注も加えている。(西野)

『中村直彦 能面 遺作集』(中村保雄著。淡交社。3月。A3判三二二頁。非売品)

近代の能面作家で、著者の父中村直彦氏の能面写真集。遺作一四四面をカラー写真(原寸大)で収めるほか、白黒の図版や、珍しい「標本能面」(カラー)、面裏などの写真を収録する。本文は「直彦の経歴・明治時代の能楽界・直彦の論述およびその他・能面遺作の数々・能面の分類について・作品解説」などから成る。何よりの手向けとなっている。(西野)

『世阿弥 アクテイニング・メソッド』(堂本正樹訳。劇書房。3月。B6判一九〇頁。一四〇〇円)

等身大の世阿弥像の解明をめざした評伝『世阿弥』に続く仕事で、演劇人に向けた『風姿花伝』『至花道』『花鏡』の現代語訳。世阿弥は僕たちの「同時代人」(あとがき)という言葉が著者の姿勢を物語っている。(西野)

『能音楽の研究・地方と中央』(山口庄司著。音楽之友社。3月。A5判三二〇頁。三七〇八円)

副題に示すように、山形県の黒川能や岐阜県の能郷の能などの音楽分析を柱とする点に特色がある。著者多年のフィールド・ワークが実を結んだ書。『塵芥抄』、下問少進手沢車屋謡本、『秦曲正名閼言』『謡曲閼言解』『色之定法聞書』などにも論及する。(西野)

『岩波講座 能・狂言 I 能楽の歴史』(表章・天野文雄著。岩波書店。3月。変型A5判四〇〇頁。三四〇〇円)

講座の中でも「I 能楽の歴史」はことに進展著しい能楽史研究を扱う。まず半分の紙数を費して「一能楽史概説」を置く。能楽大成前の形成期から始めて現代に至る通史のうち、『能楽

源流考』等の先行研究書と重なる部分にも多くの新見があるが、従来の研究では手薄だった室町後期から江戸期にかけての部分には多くの新史料を駆使して記述されており、今後ことに参照すべきものとなっている。「二能の変遷」以下、「三狂言の歩み、四諸座・諸役・諸流の消長、五地方諸藩の能楽、六能楽史をめぐる諸問題」と各論が記述され、「能楽史年表」が付載される。

いずれも実証的な記述であり、研究資料としても、研究の現段階の確認のためにも役立つものである。「未開拓な分野が能楽研究にはまだまだ残されている」と文章中に記されているが、本書を超えてそのような未開拓な分野を発掘するためには相当の努力を必要としよう。それでも、この巻に限らず、手堅い叙述を出発点として未知との遭遇の楽しみを予感させてくれるのが、この講座であるといえよう。(田口)

『日本文化論考美とこころの諸相』(西一祥著。笠間書院。3月。

A5判二二五頁。一八〇〇円)

能と茶の湯の大成における一事象、世阿弥とサクラの美学付

世阿弥自筆本「ウンリンイン」、世阿弥自筆本「カシワサキ」について、

付世阿弥自筆本「カシワサキ」、世界の中の能、ほかを収録。(西野)

『薪能 序…破…急…幻』(金春信高・文、田中克巳・写真。グラフ

イック社。4月。変型A5判一〇六頁。二九〇〇円)

近年流行の薪能の写真集。英文解説などを付す。

『二条良基の研究』(木藤才蔵著。桜楓社。4月。A5判三六七頁。一五、〇〇〇円)

二条良基研究の金字塔を樹立した大著。能に関しては、少年

期の世阿弥と良基との交渉を跡づけている章が必読。(西野)

『祭りには神々のパフォーマンス』(梅棹忠夫監修・守屋毅編。力富書房。5月。四六判四八〇頁。二五七五円)

副題「芸能をめぐる日本と東アジア」。国立民族学博物館での共同研究の報告で、芸能を多角的視野からとらえる。「神懸りから芸能へ」(山路興造)、「くるひと芸能」(守屋毅)、「翁の性格と翁面の形成」(中村保雄)が能にも関わる。(西野)

『馬場あき子の謡曲集 三枝和子の狂言集』(馬場あき子・三枝和子著。集英社。5月。B6判二九四頁。一四〇〇円)

「わたしの古典」シリーズの一。謡曲を文学として多くの人に知ってほしいという馬場氏と、狂言にゆとりのある笑いを見る三枝氏による口語訳。謡曲は「井筒」から「安達原」まで十曲、狂言は「大黒連歌」から「菓争」までの十二曲を収録。ほかに語注と解説を寿岳章子氏が執筆。(西野)

『因州藩の能楽』(田中貢著。鳥取市社会教育事業団。5月。

B5判二二三頁。八〇〇円)

郷土シリーズの三二。文禄年間から享保年間における鳥取池田藩の能楽史が主体で、藩祖光仲から二代綱清、三代吉泰までの記録を中心に叙述。徳川綱吉時代の稀曲上演の動きが地方の諸藩にそのまま反映している状況が、演能記録から確かめられるなど、有益な史料を収める。(西野)

復刻版『謡曲と仏教』(英雲外著。第一書房。5月。B6判二二六頁。三五〇〇円。初版、大正六年、丙午出版社)

復刻版『謡曲に現れたる仏教』(花田凌雲著。第一書房。5月。

B 6判四七八頁。五〇〇〇円。初版、昭和一三年、興教書院)

部分的には『謡鈔』や『謡曲拾葉抄』などに触れられていたことだが、まとまって謡曲における仏教的要素を説いた先駆的業績が英氏の著である。「法華経と謡曲」とか「謡曲と禅」とかの編目を立てて関係の謡曲本文を引いているが、もとより全曲をおおうものでもなく、一曲の作品研究を行ったものでもない。入門的な著としては、読みやすく、現在でも有益なものである。花田氏のものは英氏の書を踏まえ、各曲別に本文を引いて略説したものである。(田口)

『岩波講座 能・狂言 V 狂言の世界』(小山弘志・田口和夫・橋本朝生著。岩波書店。5月。変型A 5判三九五頁。三四〇〇円)

第三回配本。一序説(狂言と能・狂言の当代性・狂言の性格・狂言と現代)、二狂言の台本と分類、三狂言の形成と展開(一室町期・二江戸前期・三江戸中期・明治初期・四第二次大戦後を中心)、四狂言の素材(説話・連歌・歌謡・能)、五狂言の構成―筋立てと趣向、六狂言の技法、七間狂言の諸問題、狂言史年表、から成る。一と二を小山氏、三の(一)と(四)、四の(一)と(四)、六、七を田口氏、三の(一)と(三)、四の(一)と(三)、五、及び狂言史年表を橋本氏が分担執筆。行き届いた編集・記述とともに近年の研究成果を見事に反映した一書で、これだけ総括的に狂言の全体像に迫った本はない。最良の概説的研究書である。全体の三分の一の頁数を占める三はそのまま「狂言通史」となっている。今後の狂言研究の出発点となる好著。(西野)

『謡曲を読む』(田代慶一郎著。朝日新聞社。6月。B 6判三三五頁。一一〇〇円)

朝日選書332。謡曲は本来劇の台本として書かれたものだが、舞台を離れて、一個の言語芸術作品として鑑賞し研究されている、という立場から、「読む能」として批評・考察した本。冒頭の「文学としての謡曲」で著者の方法を示し、以下、〈熊野・景清・蟬丸〉の三曲を綿密に読み解いていく。謡曲を文学として読もうとする試みは明治期から存在したが、外国演劇をも視野に入れ、「詩としての謡曲」の復権をめざす読解・評釈には傾聴すべき点も多い。(西野)

『能・狂言事典』(西野春雄・羽田昶編。平凡社。6月。A 5判五〇五頁、口絵八頁。五二〇〇円)

曲名篇・事項篇・人名篇・付表・索引より成る。類書に『能楽鑑賞事典』『狂言辞典』などがあったが、曲名篇では、それらより短いスペースに要領よくまとめ、事項篇では、進歩著しい歴史的研究・技法的研究の最新成果を盛り込み、有益。付表も、例えば「能・狂言参考図書目録」では書名の羅列ではなく、短いコメントが付けられて内容把握に便利であるなど、よく工夫されている。舞台写真もカラー口絵八葉を含めて多数用いられ、現代を記録するという点からも有意義なものである。(田口)

『能楽三代』(桜間金太郎著。白水社。6月。B 6判二〇三頁。二五〇〇円)

熊本における金春流の名家桜間家の、十七代左陣(伴馬。天保六〜大正六)・十八代弓川(金太郎。明治二十二〜昭和三十二)・

十九代金太郎(龍馬。大正六)の三代にわたる芸跡を綴る。とくに能楽復興期に上京して活躍した左陣とその息弓川の歩み、古稀を迎えた著者の思い出が淡々と語られ、大正から昭和期の能界、とりわけ金春流の歴史の一コマが鮮明になってくる。編集・整理は羽田昶氏。桜間家三代略年譜を付す。(西野)

『和歌と謡曲考』(松田存著。桜楓社。6月。A5判三二五頁。四八〇〇円)

現行謡曲二百四十五番について、万葉集と二十一代集中の和歌の引歌を調査し整理したもので、各種の索引を付す。(西野)

『日本文芸史——表現の流れ』第三卷中世(松村雄二・林達也・古橋信孝編。河出書房新社。6月。A5判。三九〇頁。四八〇〇円)

第四部「基層世界の奔流」第二章「宗教者・芸能者たちとその世界」のうち、第二節「能」天野文雄、第三節「狂言」橋本朝生が直接にかかわる。中世の現代劇としての能・狂言の歴史とその特色を、最新の成果を踏まえて叙述する。本文の表現を読むコラムも有益。人名・作品名・事項索引を付す。(田口)

『能楽論 狂言』(竹本幹夫・橋本朝生校注訳。ほるぶ出版。7月。B6判四一五頁。セット頒布)

「日本の文学・古典編」シリーズの一。能・狂言とも最古本に属する金春禅鳳本・大蔵虎清本を底本に、能は「自然居士・隅田川・当麻・忠度・熊野・楊貴妃・吉野静」、狂言は「猿座頭・禁野・泣尼・鏡男・文荷・蟹山伏・鈍根草」を収め、能楽論は『風姿花伝』第二物学条々(底本・思想大系『世阿弥・禅

竹』所収本)を収める。本文・注・訳とも読みやすく、テキストにも適した内容。各々に総説を加え、付録も便利。(西野)

『観世流節の研究(増補版)』(広瀬政次著。檜書店。7月。B6判三三二頁。三〇〇〇円)

昭和二十七年に能楽叢書(文庫本)として出版された好著の増補版。実技と理論の両面から謡を深く研究した著者会心の書といわれる。謡の基礎的解説に加えて、一〇二曲にわたる各曲節の研究も謡の手引として有益。生前雑誌に発表した謡の音階についての論考と「謡曲の音階に関する文献」を付す。(西野)

『能のジャポニスム』(川村ハツエ著。七月堂。7月。B6判二三七頁。一八〇〇円)

西欧ジャポニスム(日本主義)の波動を、フェノローサ、エズラ・パウンド、イエイツ、ウェイレー、およびドナルド・キーンの「能」への発言に探る。外国人の新鮮な眼に映った「能」の姿。バイチマン作の英語による新作能「漂炎」の全文を、英和対照して掲載する。(西野)

『未刊謡曲集統一』(田中允編。古典文庫。9月。新書版四六七頁。会員頒布)

昭和五十五年八月刊『未刊謡曲集』三十一を受け、三十二冊目に当る。番外曲研究の先達である編者の、永年の蒐集・調査にかかるとなる番外曲集成の続編。本冊には「明石」から「槎の瀉」までの四十五曲を翻刻。翻刻予定曲は五七〇番ほどで、うち近代以降に作られた謡曲が過半を占め、本冊以降、明治以後の新作曲も多くなるとのこと。各曲解題が詳しい。(西野)

『日本古典音楽文献解題』(岸辺成雄博士古稀記念出版委員会編。講談社。9月。A5判五六〇頁。一九〇〇〇円)

日本の古典音楽に関する文献として、研究上必要と認められるものを、古文獻から明治以降の研究書・学術的レコードアルバムに至るまで集成し、文献目録をかねての解題を付す。対象は昭和五十九年七月末発行のものまで。初学者にとつての「研究の手引」もあり、ジャンル別に書名や解題項目名を並べ、本文の解題項目のページを検索しうるものとした「文類別項目索引」も便利。(西野)

『多武峯延年—その台本—』(本田安次編。錦正社。9月。A5判一九八頁。三〇〇〇円)

日本最古の台本とされている多武峯延年の諸台本の集大成。諸台本を翻刻し、梗概を記し、注を付し、開口、大風流、小風流、連事本(常行堂本)、連事、の各冊と、袈装脱、居曲、足上、翁・切拍子・摩多羅神拍子の各曲を収める。能・狂言と素材・構想を同じくするものが多く、能と狂言と延年が多武峯で密接につながっていたことは確かで、能よりははるかに素朴な形を伝える諸台本が語りかけるものは多い。大著『延年』(昭和四十四年。木耳社)の著者ならではの頭注と解説もありがたい。(西野)

『下人論—中世の異人と境界』(安野眞幸著。日本エディタースクール出版部。9月。B6判二三九頁。二二〇〇円)

諸史料をひろく引いて中世の下人について論じており、有益である。本誌十三号の研究展望で取り上げた「太郎冠者論—狂

言における下人」を含むが、狂言の解釈については考える余地がある。(田口)

『岩波講座 能・狂言 IV 能の構造と技法』(横道萬里雄著。岩波書店。10月。変型A5判三九五頁。三四〇〇円)

第四回配本。今日の能を作りあげている諸要素についての基礎的な知識の提供と、今日の能が演じられる形成過程に関する概略の知識の提供とを目的として、構成・論述されている。全体を一総記、二能構造の概観、三能の舞台、四能の道具、五能の役柄、六能の所作、七能の謡、八能の囃子、九能の小段、十能の演出、の十章に分け、各章をさらに数節に分けて細述する。基本的な諸要素を、さらに小さな構成要素に分解して説明し、また諸要素の結びつきに関する法則性の存在を指摘するなど、従来、あまり省みられなかった点に筆を進めているのが最大の特徴で、分析と総合が見事に展開され、本書の魅力もここにある。たとえば、四「能の道具」では、(一)能道具の分類、(二)作り物、(三)小道具、(四)扇、(五)装束、(六)仮髪、(七)面、の各項が整然と分析・記述され、体系性と科学性を備えている。能の構造と技法研究のパイオニアとしての著者の面目躍如。最新、最良の手引となろう。(西野)

『大蔵 狂言集索引 4 鬼類 小名類』(北原保雄・山崎誠編。武蔵野書院。10月。A5判一三五頁。五〇〇〇円)

全八冊の最終刊行で、分冊は完成した。当然用意されている筈の総合索引の刊行が待たれる。(田口)

『中世説話の文学史的環境』(黒田彰著。和泉書院。10月。A

5判四六二頁。一二五〇〇円)

和漢朗詠集をはじめとする古注釈類からうかがわれる中世の理解の諸相を、説話・軍記・草子・能などの分野に見る。「從來未知もしくは不毛ともいべき中世文学の史的環境の一隅を照射」。《大江山・張良・淡路》を取りあげる、Ⅲ、草子、能と注釈、の章がとくに能とかわる。(西野)

『註校謡曲叢書』三冊(芳賀矢一・佐佐木信綱編ならびに校註。臨川書店。10月。A5判。第一卷八一二頁・第二卷七四六頁

・第三卷六八〇頁。三六〇〇〇円)

大正三年四月〜四年九月にかけて博文館から発行された同書の復刻。大正初年当時の全現行曲と廃絶曲の計五四八番を収め、簡単な頭注を付した同書は番外曲研究の基礎資料で、校訂の杜撰さはあるものの、稀観本となつて久しかった。今回の復刻は誤植等も含めそのままなので、第二巻の目次に「大黒」「内府」が抜けたまま。分売不可で、価格も張ることから、せめて最小限の解説等があつてしかるべき。(西野)

『新謡曲百番』(佐佐木信綱著。臨川書店。10月。A5判四七八頁。八二〇〇円)

明治四十五年二月、博文館発行の同書の復刻版。底本は内藤風虎・露沾父子の蔵印がある百番揃の番外謡本(写本。百冊)の翻刻。アーネスト・サトウ↓バシル・ホール・チェンバレン↓佐佐木信綱と伝わり、天理図書館現蔵。(西野)

『謡曲集一 三道』完訳・日本の古典46(小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎・表章校注・訳。小学館。11月。B6判四七

二頁。一九〇〇円)

日本古典文学全集本の改訂版で、原文・脚注・現代語訳・解説等から成る。謡曲は、寛永卯月本・明暦野田本・下掛系外組刊年不明本を底本に協能四番・修羅物五番・鬘物九番・四番目物の一部として三番、計二十一番を収める。三道は吉田東伍校註『世阿弥十六部集』本を底本とし表氏が担当。寛政版《鶴亀》の写真に小段や節記号を説明した資料などが新加。(西野)

『中世説話とその周辺』(国東文磨編。明治書院。12月。A5判五〇〇頁。九〇六四円)

早大名誉教授国東文磨氏の古稀記念論文集。能楽関係では三宅晶子氏「能の舞事と白拍子と曲舞」、竹本幹夫氏「能の文体を作ったもの」が収められている。(西野)

『源氏物語転生―演劇史にみる―』(上坂信男著。右文書院。11月。A5判五六六頁。七八〇〇円)

Iの「古典演劇」に、能楽(謡曲)として『源氏物語』に取材した現行・廃絶曲三十五番を扱い、梗概等を整理する。(西野)

『狂言役者―ひねくれ半代記』(茂山千之丞著。岩波書店。12月。新書判二三一頁。四八〇円)

大蔵流狂言役者中の論客である著者の波瀾に満ちた半生記。大正末年の初舞台から、第二次大戦とのかかわり、戦後の混乱期の生活、学校公演、狂言の枠を越えて物議をかもした新しい試みなどを記す。狂言史の中でも特筆さるべき時代を生きる当事者の一人の証言として貴重である。体制に流されぬその生き方は「ひねくれ」と副題するのになさわしい。

また、千之丞氏の語り狂言歌謡を収めたLPレコード『茂山千之丞狂言歌謡選』(北川忠彦氏解説。大阪音楽大学。十月。二〇〇〇円)も出た。(田口)

『中世芸能史年表』(小高恭編。名著出版。12月。A5判四七五頁。九八〇〇円)

『お湯殿の上の日記』の語彙研究の一環として始められた索引作りが本書発刊の端緒となつて、応永八年から十七世紀初頭に至る刊本史料より芸能関係記事を抜き出し、編年順に配列した労作。芸能史研究に有益な年表を刊行した著者に敬意を表したい。ワープロによる初期段階の印刷の試みでもある。(西野)

『芭蕉と謡曲』(佐藤賢一著。わんや書店。12月。B6判一〇七頁。一〇〇〇円)

副題「芭蕉俳諧の謡曲的なもの百句」。芭蕉の句から謡曲の影響の強い百句を選び、時代を追って考証する。(西野)

〔雑誌論文、その他〕

右の単行本を概観するとき、これまでの到達点を示し今後の出発点となる、講座に代表される基本的な著作があいついだことが看取されるが、雑誌論文には特別顕著な傾向は見られない。作品研究の充実と広がり比べ、音楽論研究が極端に少ないのもここ数年の傾向である。従来作品研究のあり方を批判する立場からの論や、思想史の側からの主題論など、現在、作品論が最も活発なので、まず作品論関係から見えてゆきたい。

数年前『自然居士』の成立論があいついで発表されたことが

あったが、62年は『江口』に三つの論が集まった。発表順にあげると、まず堀口康生氏「『江口』の構造」(『女子大文学』38、3月)がある。近年は『江口』の作者を世阿弥とする表氏の説が有力であるが、堀口氏は、世阿弥による改訂があったとしても、主題や構想には観阿弥作の骨格が伝えられていると立場に立って論を進め、『江口』の主題を「ワキの宗教的到達とその詠嘆」と捉えている。つぎが落合博志氏「『江口』の構想と成立―形成の問題を中心に―」(『能研究と評論』15、5月)で、世阿弥自筆能本の改訂問題を考察し、江口の遊女を、歌舞の菩薩から普賢菩薩へ転換させたとする田口和夫氏の説を批判し、(一)遊女普賢菩薩説は改訂以前の世阿弥の初案構想段階に既にその投影が見られる、(二)遊女の歌う曲舞は、『撰集抄』の江口遊女説話に依拠した現在能形式の古作を再利用した可能性がある、ことなどを論じ、世阿弥の新作とする表説を補強する。最後に松岡心平氏「『江口』のキリについて」(『鏡仙』354、12月)で、落合説を支持し、遊女普賢説話を能に取り入れる際、遊女の死の処理に最初は妙案が浮かばなかったが、「西の空に行き給ふ」で遊女の死すなわち西方極楽往生を暗示しながら、あくまでそれは底に隠し、表面は白光につつまれ白象に乗って西方飛去する普賢菩薩のエピファニーとして描き通すこと」を考えついたとし、世阿弥晩年の作風をもそこに見ている。

『観世』の作品研究は、黒田彰氏『淡路』(1月)、金井清光氏『二人静』(3月)、西村聡氏『藤』(6月)、信多純一氏『橋弁慶』(7月)、樹下文隆氏『三笑』(9月)、山中玲子氏『大会』

(11月)の六曲。執筆者の関心や問題意識に即して取り組み、《淡路》では『三流抄』ほか中世の淡路島理解に基づいて作能されたことを指摘、《二人静》では二人立ちふたりだの芸能の歴史の中に同曲の演出の必然を見出す。《藤》では、観世・宝生両系統諸本を比較しつつ成立にも言及し、《橋弁慶》では千人斬り伝承を論じ、《三笑》では、作品の背景に当時の漢詩文享受の実態を指摘し、《大会》では、その派手な演出面について論を展開している。

ほかに作品関係では、『能楽タイムズ』に断続的に掲載されている徳江元正氏「飛行自在」(2月)、「交野の雪の鬼なれ」(6月)、「みちのくの安達の野辺の黒塚」(9月)、「菊売る市」(12月)と、大阪能楽観賞会の『かんのう』に連載の伊藤正義氏の「百万」雑記(3月)、「白楽天」雑記(5月)、「松虫」雑記(10月)がある。短いものながら、どの論も各作品の題材や構想や表現を考察しつつ、その底に流れる中世的なるものを指摘する。たとえば両氏が言及する《松虫》については、伊藤氏は、この能が世阿弥作の《錦木》から主題や表現などを継承し、後ジテが男の霊であるとともに松虫の精ともとらえうる二面性などを根拠に、禅竹作かと推定した。徳江氏は「菊売る市」で《松虫》などに引かれて「わが宿は菊売る市にあらねども」の歌が、『古今集』『伊勢物語』『和漢朗詠集』などの斧柄説話の注釈に見出されることを指摘する。

なお、この《松虫》の成立とも関わり伊藤氏も言及しているのが、落合博志氏の「『四季祝言』考」(『能楽研究』12、3月)で

ある。サン・上ゲ歌形式の重陽の節句用の祝言小謡(九月九日)と同文が《松虫》にもあるが、落合稿は、これらを含む『四季祝言』の総合的研究で、広範な調査を背景とする緻密な考察を展開する。個々の検討を通して同書の有する、貴人向けの儀礼的な内容、詞章に見る古典類聚性などを明らかにし、世阿弥時代の成立と推定した。前記《松虫》については、《九月九日》は《松虫》の一節を転用したとする立場なので、同曲の成立をかなり前に持ってこなくてはならず、禅竹作とする伊藤説と対立する。論の分かれるところである。

個々の作品研究では、ほかに三村昌義氏「謡曲『高砂』の周辺」(『魚津シンポジウム』2、3月)、赤坂明美氏「謡曲『菊慈童』——〈永遠を生きる〉——」(『昭和学院国語国文』20、3月)、西村聡氏「大社のシテ」(『国語と国文学』10月)、西野春雄「能の作劇をめぐって」——「鶴」の場合——(『日本文学誌要』38、12月)などがある。とくに、長俊作《大社》のシテについて、漠然と大社の神などとする従来の認識に対し、『謡言粗志』など江戸期の注釈書等を綿密に調査し、素盞鳴の尊であるとする西村稿が注目された。

大谷節子氏「物狂能の意味」(『国語国文』2月)、鳳城芳子氏「能における人間像」(『国文白百合』18、3月)、柴田勝二氏の「能の変質——演劇と芸能の間——」(『日本演劇学会紀要』25、4月)は複数の作品を扱い論じているが、わけても大谷稿は、廃絶曲を含む物狂能の作品群を対象に緻密に分析した好論で、これまで定説化していた感のある「偽りの狂気」(『伴狂』説に疑問を

投げかけ、能の物狂いは、狂乱を純粹に精神的な内面の問題として把握した点が、能以前の物狂いと異なると主張する。

『伊勢物語』と能との関わりを論じたものに、八島正治氏「新古今と能と——『伊勢物語』の再現」(『まひる野』9月)、西村聡氏「在原行平の像形成」(徳江元正編『室町文学論纂集』一所収、三弥井書店、9月)、松田存氏「謡曲にみる『伊勢物語』和歌をめぐる」(『二松学会創立百十周年記念論文集』所収、10月)、『三道』掲載の『伊勢物語』引用曲を対象に、百三本の『伊勢物語』本文との異同を調査し、世阿弥による『伊勢物語』引用は古注釈ではなく、阿波文庫本系の『伊勢物語』本自体からであるとす、渡辺泰宏氏「世阿弥の謡曲における伊勢物語」(『武蔵大学人文学会雑誌』11月)などがあった。

説話と能との関わりを論じたものに、島津忠夫・田口和夫・司会徳江元正氏によるシンポジウム「能と説話」(『説話文学研究』22、6月)が興味深い問題を論じ、天野文雄氏「説話と能」(一)(二)(三)『国立能楽堂』44、46、4、6月)もある。サブタイトル「形成期〜大成期の能の本説」「〈実盛〉をめぐる」(〈道成寺〉の脚色法をめぐる)が示すように、〈実盛〉〈道成寺〉などを例に、作品の形成史を簡潔に概観する。同誌には信光の生涯と作風を通観した西野春雄「変革期の権守」「風流能の開拓」(50・51、10・11月)もあるが、信光の能については樹下文隆氏「謡曲〈胡蝶〉の構想」(『中世文学』32、5月)が必読。胡蝶が梅花に縁なきことを嘆くというこの能の構想は、五山僧たちによる宋代詩文の享受を背景とされていること、『源氏物語』を脇本説として利用

している点に類曲〈朝顔〉の影響が見られること、心情描写と情景描写の交響、などを考察し、信光晩年の作風を明示した。漢籍享受の実態を調査し、世阿弥時代と異なることを指摘した点が目新しい。

能の漢籍摂取については、竹本幹夫氏「能における漢詩文の受容」(『和漢比較文学叢書』6、汲古書院、10月)がある。能の新しい題材として漢籍が摂取され、いわゆる唐事の能が風流能の基盤となっていく流れをたどっている。

『鏡仙』の「研究・十二月往来」には、短いながら問題提起や新見があった。①西野春雄「訛伝——須磨源氏の詞章——」(2月)、②表きよし氏「能〈阿古屋松〉と『平家物語』」(4月)、③竹本幹夫氏「古活字版『八帖本花伝書』覚え書き」(5月)、④田口和夫氏「弱法師のアイ——筑波大学本のこと——」(7月)、⑤山中玲子氏「舞の序破急説覚え書き」(7月)、⑥三宅晶子氏「遊行柳の世界」(9月)、⑦小田幸子氏「酒天童子の首」(10月)、⑧松岡心平氏「江口」のキリについて」(12月)の八篇である。

①は『須磨源氏』の詞章の異同の検証、②は作詞に寛一本系を使用していることを考察、③は伝本調査の中間報告、④は寛永十六年以前には既に現行に近い形で上演されていたと推定、⑤は室町末期以降の伝書に見える舞の序破急説を、位付けとしてだけでなく舞の種類や形態を示すものとして読み直すべきことを説き、⑥は信光の作風に「不統一」ゆえの効果があることを指摘。⑦は酒天童子の首を取る演出が古くは面と頭を取っていたことを考察、⑧は『江口』論で触れたように、終曲の構想に、

二元対立の世阿弥のドラマトゥルギーを見る。

廃絶曲関係では、八島合戦譚の享受史の中に《屋島寺》の位置をさぐった岩崎雅彦氏「八島合戦譚への一視点——番外曲「八島寺」の周辺」(『日本文学論究』3月)、『徒然草』享受史との関連を考察した島内裕子氏「徒然草と謡曲」(『解釈』11月)などがあり、『能楽タイムズ』に連載の堂本正樹氏「番外曲水脈」は、劇作家の眼で番外曲群に歟を入れている好読み物だが、ついに百回を越えた。堂本氏には、能と歌舞伎に菅原道真像の変遷を追った「能・歌舞伎——道真像の変遷」(『太陽スペシャル』天神伝説、10月)もあり、廃絶曲《菅丞相》ほかを論じている。西野春雄「所謡再見——石見銀のこと」(『観世』2月)は、いわゆる所謡(Ⅱ地方謡曲)の《石見銀》を紹介する。

ところで、戦前の能楽研究を集大成した『能楽全書』第一巻は「能の思想と芸術」であった。思想的な面から、世界観を、宗教観を、道義観を、社会観を論じ、芸術表現を、そして芸術理論を説き、能の思想と芸術の根本問題に取り組んでいる。戦後は、こうした方面の研究は殆んど見られないが、近年、思想史研究者の立場からの謡曲研究が発表されている。『季刊・日本思想史』28(8月)が特集した「謡曲の思想Ⅱ」の諸論もそのひとつ。窪田高明氏「平家一門の妄執と救済」、鳥居明雄氏「修羅と鎮魂」、八木公生氏「清経」の主題——あはれと修羅と、村上隆氏「忠度」の構造、遠山敦氏「景清伝説の一樣態——『景清』シテの名をめぐって」、山内春光氏「花鳥風月の一つの形——『熊野』の宗盛を手がかりに」、菅野覚明氏「再会の現象学——『声刈』の意味空間」、

相良享氏「世阿弥における芸論と謡曲の思想との接点——『五音曲条々』『金鳥書』を中心に」の八篇で、作品の主題を構想を論じたものが目に着いた。越智礼子氏「謡曲「桧垣」における縁起／空」(『比較思想史研究』13、3月)もある。さまざまな視野からの照射・考察は望ましく、今後とも活発になることを期待したい。

能楽論研究は62年も少なかった。ここ数年の傾向である。そのなかでは三宅晶子氏「禅竹の能楽論における心の問題」(『国文学研究』91、3月)が注目される。金春禅竹の能楽論に多用される「心」の語の分析を通して、禅竹の芸論を体系的に把握しようとする試みである。師であり岳父である世阿弥の芸論論を、禅竹が吸収し深化させていく過程をその著作のなかに読み解き、芸論の展開を位置づけている。

世阿弥の芸論に関しては、岡崎正氏「世阿弥の伝書における分類意識」(『駒沢短大国文』17、3月)が『五音曲条々』における曲趣・芸位の視点の交錯を見、石黒吉次郎氏「世阿弥の能楽論と仏教(二)」(『専修国文』41、9月)が「念ろう」(『花鏡』)ほかの仏教語を整理しつつ、理論と仏教との関わりを論じる。金井清光氏「中世芸能清泉抄(五)」(『観世』10月)は、『花鏡』の「担板感云」は位牌云、つまり「亡父観阿弥の遺訓」の意であることなどを考証している。

作品論の充実に比べいささか寂しいが、こういう年もある。なお書評に、八嶋正治『世阿弥の能と芸論』(昭和60年)に対する竹本幹夫氏の評(『国文学研究』91、3月)と、堂本正樹『世阿弥』(昭和61年)に対する味方健氏の長大な書評(『芸能史研究』

97、4月)があったことも付け加えておきたい。

また、「二十歳をもって成人とする年齢意識の源流はどこにあるのか。すでに十五歳で「一人前」と見なされていた日本の中世社会において、二十歳が「自立年齢」としてとらえられる過程を、さまざまの史料から洗いだし、中世人の意識と慣行の世界を探る」館鼻誠氏の「中世人の二十歳観」(『月刊百科』302、303、12月、63年1月)が世阿弥の『花伝』第一年来稽古における年齢の分け方とも関連して興味深かった。

室町後期の伝書に関しては、竹本幹夫氏「由良家蔵能笛手付『番笛集』解題と翻刻(二)」(『実践女子大学文学部紀要』29、3月)、三宅晶子氏「大蔵庄在衛門家伝来型付三点の紹介」上下(『能楽タイムズ』1・2月)、金春安明氏「金春安照型付新資料発見」(『金春月報』5月)などがあつた。

音楽関係では、蒲生美津子氏「能の音楽」(一)(二)(『国立能楽堂』1~3月)が能の音楽鑑賞の平明な手引であり、高桑いづみ氏「平岩流唱歌をめぐる一考察」(『能研究と評論』15、5月)は、明治中期に廃絶した笛の平岩流の唱歌付七種を紹介・検討し、一噌流との近似を抽出し、両流の異端的傾向をも指摘する。

演出関係では、『鏡仙』で紹介した山中稿・小田稿のほかに、岩崎雅彦氏「修羅能の扮装——弓矢と胡籥——」(『芸能史研究』98、7月)をあげる。修羅能で弓矢・胡籥を使っていたこと、世阿弥時代の能の扮装や演技が写実的であったことを論証する。

仮面研究では、単行本の項で取り上げた後藤・中村氏の大著が62年の一大成果であるが、そのほかでは中村保雄氏「中世仮

面と宗教および権力者」(『芸能史研究』99、10月)がある。中世の仮面が信仰の対象でもあったこと、たとえば尉面の作者である大光坊が近江国大吉寺の僧であったこと、秀吉は大光坊の弟子目目是閑に天下一の朱印状を与えたが、その背景に、是閑の面を戦勝の褒美とする意図があつたことなどを論述する。

62年における歴史研究の大きな成果は、単行本の項で触れた岩波講座能・狂言の『能楽の歴史』と『狂言の世界』であろう。紀要や雑誌論文は多くなかったが、今後の研究の基礎となる論考も少なくない。能の成立前夜を教示するものに、永島福太郎氏「春日若宮祭と一つ物」(『芸能史研究』97、4月)があり、春日若宮の芸能を論じ、阿部泰郎氏「中世南都の宗教と芸能——信如尼と若宮拜殿巫女をめぐる——」(『国語と国文学』5月)は「中世神社の祝祭的環境」の一端を解明する。山路興造氏「被差別民芸能の変遷」(『芸能史研究』98、7月)は、芸能民が被差別民として掌握されていく過程を、鎌倉後期から南北朝に及ぶ史料を駆使しながら論証し、芸能が本質的に有する「呪術生」を考える上でも有効な示唆を含んでいる。

また単行本の項に示した『日本文芸史』は表現史を謳う文芸史であるが、第三卷中世で天野文雄氏が『風姿花伝』第四神儀の「稻経の翁・代経の翁」の命名意識を探っている。この指摘は、田口和夫氏「いなつみの翁よなつみの翁」(『能楽タイムズ』1月)で、「こととり」を「音頭取り」とする新見や、同氏「くぐつのこととり」(同、3月)とつながるものであろう。

『季刊へるめす』創刊二周年記念別巻3(2月)は「座談会」中

世芸能にみる日本人の心——花鎮・婆娑羅・会所——として、網野善彦・中村雄二郎・松岡心平・横山正氏による「第一部日本文化のダイナミズムをさぐる」と、岡田幸三・勅使河原宏・中村氏による「第二部能舞台と花」の二つの座談会を載せる。

いずれも橋の会の〈半部立花供養〉の上演をきっかけにしてのもので、前者は南北朝期に関する生活史・文化史的観点から主として婆娑羅・会所について広く論じている。『国文学』(6月)の特集「中世とは何か」も松岡心平氏「南北朝前夜」ほか、時代の動勢や形成の場を視野に入れつつ考察する。

『月刊百科』297(7月)は「能・狂言」の小特集で、横井清氏「狂言「靉猿」——中世生活文化史のなかの」、天野文雄氏「宇治猿楽の形態——「宇治座」をめぐる」を載せている。

表章氏「演能所要時間の推移」(『日本文学誌要』36、3月)は、室町時代から江戸時代、近・現代の番組を精査し、それらの資料を活用して、室町期から現代に至るまでの「能時間」の変遷過程を探り、それをもたらしした能の質的变化の程度を推測した興味深い調査である。漠然と、室町時代の演能所要時間が現在より短かったと言われ、これ以前にも能勢朝次氏が「能の見物今昔」(江馬務編『芸能史の研究』所収、昭和18)で言及しているが、数字で示されたのは初めてである。室町中期の能時間が今の半分以下であったこと(40%程度)、それが漸次延びて来て、室町末期には60%に達し、江戸初期には70%に近づき、江戸末期には現在の90%にまで近づいたことを推測した。そして、演技速度の緩徐化の背景に、基本的技法の整備、舞台の広さの拡

大、式楽化などがあると指摘している。

表氏には北七大夫をめぐる考察から派生した七大夫署名謡本の問題を取り上げた「北七大夫長能節付本をめぐる——付「古七大夫考」補訂——」(『能楽研究』12、3月)もある。七大夫署名謡本(三種、計三二曲と小謡二種)の系統調査を基に、偽車屋本が江戸初期喜多流の正本的存在であったこと、北海道伊達市開拓記念館の伊達本は金春流謡本の一部の節付けのみを七大夫が行ったこと、などを論証している。

そのほかの能楽史研究には片桐登氏に、禁裏上演の女房役者浮舟大夫や織田信長に近い素人の笛役者伊藤安中の閱歴を考証した「尋ね人 女房役者浮舟大夫②」「尾・濃商買司 伊藤安中①②」(『宝生』3・10・12月)があり、また片桐氏の「金剛流の書上——書上五種の紹介と考察——」(一)(二)(『金剛』5・9月)は、寛文から明治に至る金剛流書上に詳しい解題を付し、書上五点を翻訳した労作で、所演曲調査の基礎資料を提供して貴重である。

前西芳雄氏「湯浅家蔵細川忠利書状——丹波梅若の一資料として——」(『芸能史研究』97、4月)は丹波梅若史に光をあてる資料紹介。

表きよし氏「大倉源次郎氏蔵『小鼓大倉家古能組』」(『能研究と評論』15号、5月)は、安土桃山期から江戸初期にかけての貴重な資料であり、林和利氏「薩摩藩主・島津重豪の生涯における能楽の享受」(『鹿児島女子大学研究記要』3月)は、地方諸藩における演能状況、お抱え役者の実態、江戸文化流入の諸相を、薩摩藩主島津重豪(一七四五—一八三三)一代に集約してみせる。単行本の項でも取りあげた『因州藩の能楽』など、地方諸藩に

おける能楽享受史の解明が着実に進みつつあることを喜びたい。林氏には『上井覚兼日記』能・狂言関係記事一覧(『芸能文化史』10月)もある。浜名敏夫氏「本土寺過去帳の猿楽考」(『我孫子市史研究』11、3月)は中世の猿楽、本土寺の猿楽者についての考察。五島邦治氏「室町幕府の式楽と猿楽の武家奉公」(『日本歴史』10月)は、室町殿における観世座の独占、幕府による猿楽支配の構造、武家社会における諸猿楽座の競合、などを考察した論考で、文安元年から文明五年までの猿楽座別年表を付す。籠谷真智子氏「激動期の本願寺能楽——下間少進法印仲之を中心に——」(『真宗研究』31、2月)は、副題が示すように素人ながら四座の大夫をも凌ぐ活躍を見せた下間少進仲之(仲孝)を中心とした本願寺能楽史。高橋好美氏「祝言能」の周辺(『日本文学論叢』16、5月)は、祝言能(一日の最終演目としての協能)の沿革を考察し、「乞能」「御服頂戴」などの実態を解明する。

この年から『観世』に連載が始まった堂本正樹氏「能楽史かれんだあ…日づけのある窓から…」(1~12月)は、中世から現代まで広く能楽史関連文献を渉猟して、日録に編集した楽しい読み物で、どんな些細な事件をも見逃さない、アンテナの感度と広さには一驚。史料の所在を教えてくれる論文の紹介もありがたい。一年間で、一月一日から二月三十日まで進んだ。

同じく『観世』に連載中の増田正造氏「近代文学と能」8~19(1~12月)が、近代・現代の文学作品や文学者と能との関わりを幅広く取りあげている。ここにも、能に關係する作品・記事なら何でも蒐集せずばやまぬ姿勢がうかがわれる。近代関係で

は、ほかに西野春雄「野上弥生子の日記から」——近代能楽史の名手たち——(『日本文学誌要』36、3月)もある。

狂言関係では、まずテキストの紹介三種が注目される。

永井猛氏『祝本狂言集』——翻刻と解説——(『能楽研究』12、3月)は前年『観世』六月号で紹介された鴻山文庫蔵本の翻刻と書誌・各曲覚書である。旧蔵者祝氏について、落合博志氏の指摘を受けて、元和五年極書、観世暮閑筆(芭蕉)も所持していた人物であることを記す。ある程度教養ある人物が想定されよう。祝氏によって改装される前に相当の時間が経過していることを考え合わせると、外証からみても、この書の古いことが云えそうである。各曲の内容も古態と考えられるものが多く、「中世の狂言から近世の狂言へと脱皮しつつある転換期の狂言の姿を如実に伝え」る本であることは認められよう。本書の記述から天正狂言本の本文を照らし直すのも有効であろう。狂言23曲、問狂言5曲、三番叟詞章1を含む。竹本幹夫・橋本朝生氏による『日本の文学古典編 能楽論 狂言』(ほるぷ出版、7月)のうち、橋本氏による「狂言」は虎清本のうち狂言七曲の語釈と諸台本を参照した解釈で、各曲の特徴を解明している。竹本氏「常磐松文庫蔵『鷺流狂言伝書』一六四点」(『実践女子大学文学芸資料研究所年報』6号、3月)は、笹野堅氏が野中本として紹介していた江戸末期鷺伝右衛門派の狂言伝書群の中心をなす『狂言記』(版本狂言記ではない)27冊の紹介と珍曲十二曲(懐中嬉・隠レ笠・金藤左衛門・鶏猫・紺屋吃・重喜・児流鎗馬・

仁王・祝詞神楽・臈山人・箕被・無言行)の翻刻。ながらく所在が知られなかったものの再発見だが、これで伝右衛門派の狂言を通時的に把握することができるようになった。

歴史的研究としては永井猛氏の宮島関係の二点がまず注目される。「宮島町立宮島歴史民俗資料館蔵 吉村氏寄託能楽関係文書目録(統)」(『宮島の歴史と民俗』5号、3月)は前号に続くもので、狂言を中心とする本文書にかかわる人物考証、各文書の目録と解題を収める。「宮島の大蔵八右衛門派狂言」(『芸能史研究』99号、10月)は大蔵虎光本(転写本)と伊藤源之丞吉高本の紹介で、後者を宝歴頃書写と推定し、八右衛門派の最古揃本としての価値を明かにしている(後者は永井氏・高橋修三氏の校訂で昭63、平1に翻刻、前者は翻刻作業中)。

伊藤正義・山村規子氏による「資料紹介『月次狂言稽古会番組』(『芸能史研究』98号、7月)と同索引(同誌98号、10月)、伊藤氏「明治・大正期の京都における和泉流狂言——南大路玄叟・同南動翁をめぐって」(『人文研究』39号、12月)は三宅庄市らが東京に移住した後の京都和泉流についての研究と資料で、これまでの空白を一挙に埋めるものとなった。『狂言集成』の底本となった三宅派本は南大路家蔵本だった。(昭29年に南大路家より能楽研究所へ寄贈された。今回伊藤氏の調査によって、南大路家にはまだ一具の狂言伝書がある事が判明し、伊藤氏論の末尾に目録を載せているが、伊藤氏の好意ある斡旋によって、これも能楽研究所に寄贈された。)南動翁南大路勇太郎が小学校長としてかかわっていたらしい子供狂言については、小林貢

氏「子供狂言のこと」(『国立能楽堂』47号、7月)にくわしい。なお、小林氏「講演 狂言の世界」(『全国私立中学高等学校第26回国語科研修会研究集録』12月)は、狂言の歴史と内容を概説したものである。

岩崎雅彦氏「江戸初期の狂言風流」(『能研究と評論』15号、5月)は新しい眼で狂言風流を見直し、一步を進めた論である。江戸初期の上演記録ならびに虎清本・享保保教本の注記によって、虎明本段階で整理を加えられるより前の古い演出(千歳の演技に続いて演じられる)の存在を確認し、これらが翁帰りのあと、あるいは三番叟とかかわって演じるように整理されるのは、保教本注にいう「大夫方ニ余り不好」という理由に基づく推論している。また詞章の検討を通して、間狂言から狂言風流への影響があったことをへ八幡の風流へ春日の風流へ餅の風流へについて論証している。

近年、北川忠彦氏・池田廣司氏が狂言研究に回帰されたのはよろこばしい事だが、本年も北川氏三点、池田氏一点が注目される。

北川忠彦氏「『昆布柿』の変遷」(『芸能史研究』96号、1月)百姓狂言へ昆布柿の古態は、柿・昆布・野老を貢納するもので、和歌もそれに合わせて五七五・七・七と詠み分けたとし、天正狂言本へ三人百姓の丹波柿・越前紙・若狭昆布は系譜外の流動であるとする。百姓狂言が三人立てから二人立てに変化する段階で、漬柿^{あはし}にかけて淡路柿、シテとしての仕事を持つ丹波昆布という形が定着すること、百姓狂言におけるアド↓シテ

方式へアド開口・シテ後出は天正狂言本まで遡れるが近世に確立、また滑稽な演技・セリフをシテに集中することも近世に確立することを述べる。古態の想定、天正狂言本の記述に不自然さがあるとの指摘は納得できるが、集成本・杭全本にみられる丹波が昆布・野老の二種を持つものを古態に続くものとして天正狂言本を系譜の外におくことには疑問が残る。それは古態の残存というより和歌の言葉からの再発見としての演出と思われるからである。同じく北川氏『文蔵』・『青海苔』・『語り』(『観世』4月)は狂言の無奉公物(抜参り物)のうち「文蔵」と幻の『石橋山のさうし』、「青海苔」と『源平盛衰記』のかかわりについて考え、一谷合戦を語る「姫糊」もあわせて、近世中期鷺流における語りの簡略化傾向、逆に大蔵流における語り重視の傾向について説く。主をシテとするこの一類に焦点を当てることで、作品による狂言史の一面を明らかにしている。北川氏「狂言『寝替』について」(『国立能楽堂』49、9月)は茂山千之丞氏による復曲が国立能楽堂において演じられるに当って虎明本以降の諸台本の特徴を解説したものである。同誌には茂山千之丞氏「私にとつての『復曲狂言』も見え、狂言本来の庶民的なエネルギーに満ち溢れた作品を廃曲の中に見出し、〈隠れ等〉〈眉目吉〉〈独り松茸〉〈寝替〉と演じて来たことを記す。

池田廣司氏「狂言の歌謡——版本『狂言記』の小舞謡を中心に——」(『和光大学人文学部紀要』21号、3月)は狂言記諸本(『狂言記』『続狂言記』『狂言記拾遺』)に収められる小舞謡をとりあげ、鷺保教本『小舞』に見える曲と、それに見えぬ曲に分けて

考察している。

国立能楽堂がその仕事として復曲等に取組んでいるのは、よろこぶべき事だが、狂言においても注目すべきものがある。私の知る範囲でも、一月「松囃子」の新演出、四月「長刀応答」の工夫、六月「大会」のアイ再演(『観世』12月に、田口「大会」間狂言の新作について)がある、九月「寝替」、十二月「若菜」復曲(その経緯は『国立能楽堂』52、12月所載の小笠原恭子氏「若菜」復曲まで)に詳しい)と試みられ、狂言を活性化するのに役立っている。その『国立能楽堂』474849号(789月)には、田口和夫「狂言の性格(一)(二)(三)」を載せ、狂言の上演の場とその内容とのかかわり方について、鎌倉時代のツレ猿楽以来、中世に至る狂言について考え、近世に一変することを述べた。

稲田秀雄氏「小名狂言における「とりなし」の方法」(『同志社国文学』28、61年12月)は昨年度のものだがとりあげておく。狂言の古台本をもちいて太郎冠者の役割・機能を分析する。「柑子」〈鈍根草〉〈栗焼〉などの検討を通して、太郎冠者の語り・ハナシを言葉による一種の詐術であるとし、事態を一挙に転換させる「とりなし」の方法が小名狂言の構想を規定していると指摘する。天理本「柑子」〈鈍根草〉の語りが過去と現在を結合・重層させる中世的故事引用の方法に倣っているとするのは面白かった。テモテ・カーン氏「「路」のダイナミックス——狂言の記号論」(『ユリイカ』19の9、8月)は「昆布売」〈禰宜山伏〉〈宗論〉の三曲を素材にして分析する。それぞれの曲の歴史は問われず、また詞章の「もほとんど引かれない。狂言の解釈に資する部

分はあるが、狂言と素材として記号論的分析を施したというにとどまろう。野崎典子氏「狂言の女と男——「二九十八」のばあい」(『芸文東海』9、6月)、「同一——「千切木」のばあい」(同10号、12月)は小品だが、算用のできるりっぱな女は敬遠したい、あるいは、女をわわしくさせるのは男というような読みは面白い。田口和夫「復曲〈鷺〉について」(『観世』5月)は復曲の経過報告、同「弱法師のアイ——筑波大学本のこと」(『鍊仙』350、7月)は『間・風流伝書』とのかかわり、寛永十六年以前の上演可能性について記す。関屋俊彦氏「山脇家の人々(その三)——初代元宜①——」(『華泉』39、6月)は人物考証。『能楽タムズ』の「能楽対談」は資料としても有益だが、その三六六回は「忠三郎家との三代のかかわり」(6月)として松山の大藏流狂言役者古川七郎氏と北川忠彦氏の対談を載せ、松山の狂言、忠三郎家とのかかわりなどに触れている。三六七回は野村万之丞・小山弘志両氏による「狂言の今とこれから」と題するもので、狂言〈鷺〉の復曲・海外公演のことなどに触れている。

迫野虔徳氏「促音・撥音の表記の動揺——『天正狂言本』の場合——」(『文学研究(九州大学文学部)』84、2月)は天正本における撥音と促音の表記は、他で工夫された表記法をこの記録者が借用したがうまくいかなかったものとし、〈恋のおふぢ〉の「きふくつ」を教訓と解している。また天正本の場合、促音も撥音もともに未分化で、そのため両者の弁別がしばしば曖昧になったと述べ、その例として〈竹生嶋まふで〉の「べんざい天」「べっざひ天」などをあげている。前者は納得できるが、後者

は狂言研究側の解釈と異なる。なお考える余地がある。大倉浩氏「天理本狂言六義の「ござある」」(『静岡英和女学院短大紀要』19、2月)は天理本における「ござある」が上巻前半部分に集中してあらわれ、それ以降は「ござる」が優勢となる現象について論じる。大倉氏は、この原因を、筆録者の用語選択意識の変化としてとらえ、虎清本と虎明本の間における同様の変化、弥太郎・弥右衛門の呼称の変化、「なら」「たら」の出現、などのすでに知られている現象も同様の意識によるものと位置づける。さらに「ござらぬ」が優勢で「ござない」がすくないという現象も考えに入れる。「伝承」がそうだからというのではなく、より意識的に古い語形を選択しようとする意識が上巻前半にはあり、それが筆録の間に変化したとする論旨は明確であって、天理本成立について論ずるときに逸することのできない視点を提供している。

雑誌『文学』4月号は歌舞伎特集だが、小西甚一氏・服部幸雄氏・諏訪春雄氏による「〈座談会〉歌舞伎研究を語る」をはじめ、能楽とのかかわりを説く論は多い。山路興造氏「初期歌舞伎の周辺——阿国と同時代の芸能者たち」における狂言師の位置づけが面白かったが、「能楽研究の一環としての狂言研究と、初期歌舞伎研究としての狂言研究とが、まともに咬み合わせること」という批判は耳に痛いところであった。

以上、62年に発表された単行本と論考等を紹介しながら研究動向を記した。遺漏の多からうことをお詫びし、大方の御叱正をお願いしたい。